

廃棄を生み出す消費からの脱却

先日アップサイクル製品を購入した。某アミューズメント施設のキャストが着用したコスチュームの生地がアクセントとして施されたトートバッグである。同じような素材と大きさの製品と比較すると、そう易々とは購入出来ない価格で販売されていた。悩んだ結果、購入の決め手となったのはそのデザインであった。

アップサイクルとは、本来は廃棄されるはずの製品に新たにアイデアやデザインなどの付加価値を与えて再生することである。様々な価値をプラスしたモノづくりという側面だけでなく、持続可能な社会を実現させるための手法の一つとなっている。同

じ再生利用であるリサイクルと比較すると、製品を原料に戻す際のエネルギーが不要で地球環境への負担が少ない。

一方、製品の価値を高め寿命を伸ばすとはいえ、モノはいずれ廃棄されるという現実は否めない。消費者の立場としては、廃棄となっても製品の素材が環境に負荷をかけず、地球にやさしい製品選びが必要である。

アップサイクル製品を手にした今、これまでのように飽きたら廃棄をせずに、少しでも長く大切に使うという気持ちが芽生えた。廃棄を生み出す消費からの脱却の第一歩となった。

編集後記

本号の「調査報告」では、家畜ふん尿を主体としたバイオマスの資源循環の取組について調査部より報告しております。JWセンター独自の調査は今後も継続していきますので、誌面にて報告いたします。

「コラム」では、白井グループ（株）前代表取締役 白井氏の遺稿をもとに再編成しご執筆いただきました。同社の考えるDXは“収集運搬の現場から”。DXによる効率アップが実現すると、その余力を分別収集に活かし、経済的・低炭素な資源循環が可能となることなど考察されています。

「産廃鼎談」の第7回は、弁護士の芝田稔秋様をお迎えしています。長きにわたり廃棄物処理業者の方々の法律相談を受けていらっしやっただからこそその視点、またご経験から、廃棄物処理法と、その今後の役目など貴重なお話をさせていただきました。

「産廃クロースアップ」では、野村興産（株）イトムカ鉱業所の水銀リサイクルの状況についての取材記事を掲載しています。取材を受け入れていただき各所にて丁寧なご説明をいただきました築地原所長をはじめとするご担当者の皆様に感謝いたします。

電子マニフェストの「ユーザー事例紹介」では、東日本旅客鉄道（株）様よりご寄稿いただきました。2011年から導入されておりましたが、2022年大規模な組織変更とともに新しい加入者番号を取得し再発行をされたことなどについてご紹介いただいています。

最後に、ご多忙の中、ご執筆いただいた皆様、記事作成にあたり編集にご協力いただいた皆様、本誌を読んでいただいた方々に心から感謝申し上げます。（広報室）

■本誌に関する連絡先：総務部広報室（e-mail：jigyo@jwnet.or.jp）

〈アンケートへのご協力のおお願い〉

より充実した誌面作りのために、本誌の記事内容等に関する読者アンケートを当センターホームページ（以下のURL）に掲載しています。本誌に関するご意見、ご要望を是非、お聞かせください。

URL https://www.jwnet.or.jp/info/kikansi/kikansi_anq/index.html

JWセンター情報（季刊）VOL.23 NO.3 発行日：2023年10月16日発行 発行人：関 荘一郎

発行所：公益財団法人 日本産業廃棄物処理振興センター

〒110-0005 東京都台東区上野三丁目24番6号 上野フロンティアタワー 13階

TEL：03-5807-5911 FAX：03-5807-5912 <https://www.jwnet.or.jp/>

デザイン・印刷：大日本法令印刷株式会社